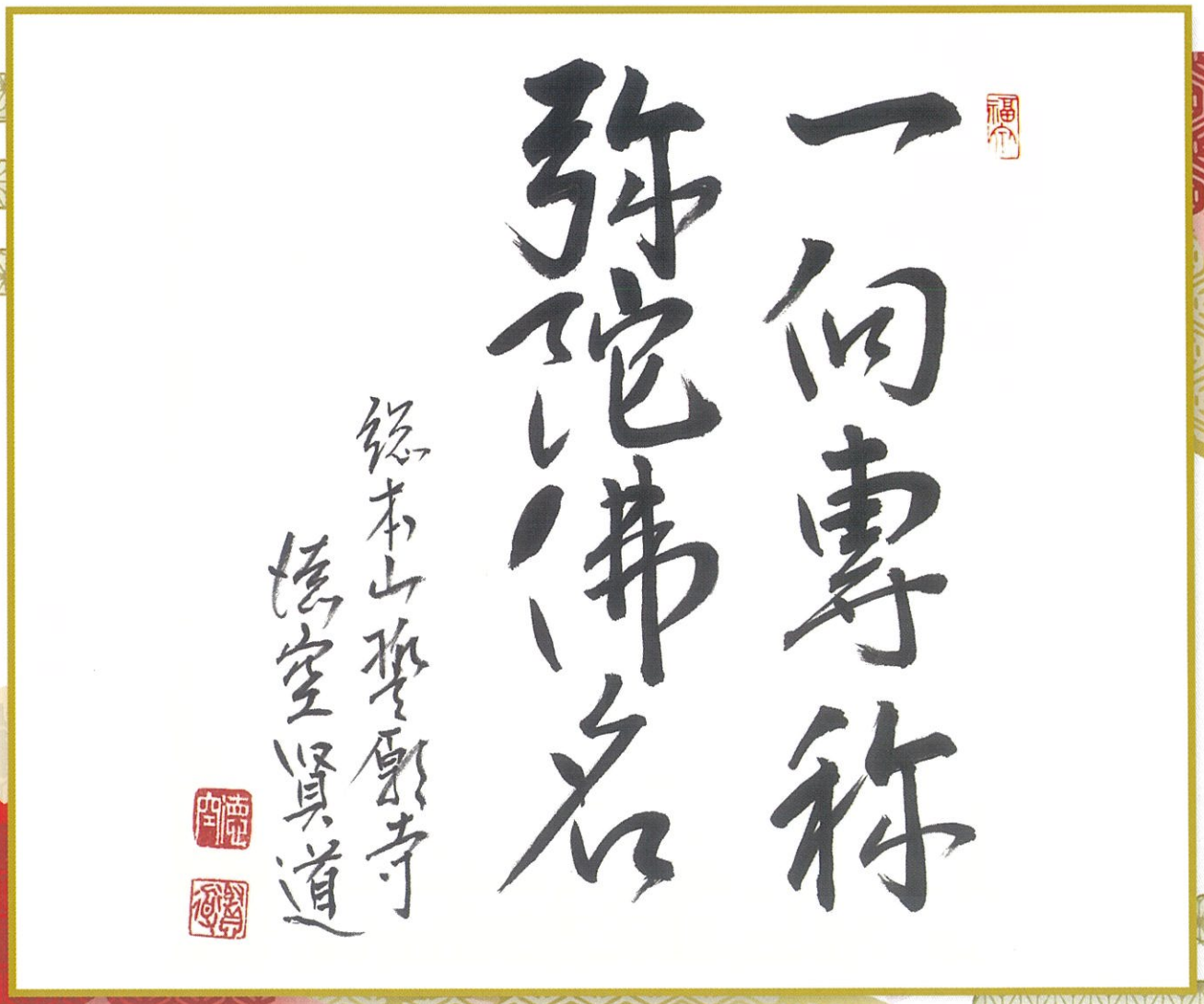
白蓮華

2023
正月号
VOL.166
浄土宗西山深草派宗務所
総本山 誓願寺

謹賀新年



◆目次◆

●新春を迎えて
●開宗八百五十年に向けて⑭
●賢問子行状記㉟
●インドドタバタ夫婦道中記㊿
●お釈迦さまの十大弟子 26
●総本山誓願寺だより
●何でも“お寺探偵団” Vol.64
高野堂　妙心寺

新春を迎えて

浄土宗西山深草派管長
総本山誓願寺　法主
倉内賢道

謹賀新年

新年明けましておめでとうございます。

長引くコロナ禍、ロシアのウクライナ侵攻は、世界を大きく揺るがしています。今の世の中は戦後最大の難局と言われています。そのような中、本山では三年ぶりに御忌大会をはじめ各行事を予定通り行うことが出来ました。各々関係の皆さまには感謝申し上げます。

来年、令和六年は元祖法然上人により浄土宗が開かれて以来、八百五十年の節目を迎えます。本派におきましても四月二十一日より二十五日にかけて五日間、総本山誓願寺に於きまして、慶讃法要が盛大に営まれることになっており、着々と準備が進められております。

元祖法然上人が浄土宗をお開きになったご本心を考えてみますと、善人も悪人も関係なく、すべての人を漏らさず、極楽浄土に往生させたいというお考えによるものです。法然上人は修行を始められてから、たくさんのお経や書物をご覧になられましたが、ついに唐の時代の高僧、善導大師の『観経疏』に大切な一文が示されていることを発見されました。

『阿弥陀如来の本願について考えてみますと、その御心は様々な難しい修行を求めるものではありません。ただ人に、ひたむきに南無阿弥陀仏を称えてほしいということなのです』

それ以来、この浄土宗の教えが日本で初めて開かれて、今やお念仏の声が聞こえない場所はありません。元祖法然上人によって注がれたお念仏という水は、遠く時代を隔てた私たちを潤して下さっています。

私の願いは、皆さまと一緒にお念仏を喜んでお称えする毎日を過ごすことで、元祖法然上人の、大きな御恩にわずかでも報いたいということです。お念仏の教えを信じて気持ちを新たに今年一年が良い年であることを、心から念願しております。

令和五年　元旦

総本山誓願寺　第百参世
徳空賢道　謹識

開宗八百五十年に向けて⑭

布教師会　半田了靖

お念仏「南無阿弥陀仏」が広まったのはなぜ？

法然上人が浄土宗を開宗されてから八五〇年という長い年月が経とうとしております。現在では日本の仏教徒の半分以上が法然上人を師と仰ぐようになりました。そして、多くの人が「南無阿弥陀仏」を称え、誰でもお念仏を耳にするまでになりました。これほどまでにお念仏が広まったのはなぜでしょうか。浄土宗が開宗された頃の人々のことを知るために、八五〇年前に遡ってみたいと思います。

平安時代末期、それは、仏法が衰えて末法の世に入ったと信じられていた時代です。それを裏付けるかのように多くの戦乱が起き、治安が乱れて人々は不安な生活を送っていました。そんな中、京の三分の一を焼き尽くす大火によって多くの人が亡くなり家を失いました。追い討ちをかけるように、日照りと台風と洪水によって収穫が途絶えました。人々は飢えと病に倒れ、京のあちこちに死体が放置されました。まさに地獄絵さながらの情景だったと『方丈記』に記されています。

人々は現世に絶望し、苦しみのない極楽浄土への憧れを抱きます。しかし、当時の教えでは極楽に往生することは大変難しいものでした。煩悩を捨てて厳しい修行を積まなければならなかったのです。比叡山で厳しい修行を積み「智慧第一の法然房」と呼ばれた法然上人も例外ではありませんでした。自身も煩悩を捨てることは難しい凡夫であると自覚され、そんな凡夫でも往生できる方法を追い求めておられました。数十年の歳月をかけて膨大な書物を読み、高野山や奈良へも出向いて多くの教えも学び、比叡山の山奥に籠られました。そして、ようやくその確信を得ることができました。その教えとは、善導大師が記した『観経疏』の末尾にある一文です。

「上より来、定散両門の益を説くといへども、佛の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもっぱら弥陀佛のみ名を称せしむるにあり」

意訳しますと、

「ここまで極楽へ往生するための修行方法を説きました。しかし、阿弥陀さまとお釈迦さまの私たち凡夫を救わんとする誓の真意は、ただ一向にお念仏を私たちに称えさせることにあるのです」

つまり、私たち凡夫は、ただ一向に「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えることこそが、難しい修行よりも何よりも大切だ、という教えでした。

こうして、法然上人はお念仏で救われるという道理（理論）を確立して浄土宗を開宗され、お念仏を世に広められました。末法乱世に苦しむ人々にとって、誰でも救われるお念仏の教えは生きる支えとなりました。

その後、何百年という年月が経った今も、私の近所のお婆さんたちは「なむあみだぶ」と口ぐせのようにお称えになります。そうやって私たちのご先祖さまもお念仏を生きる支えとされ、何代にも渡って受け継いでくれました。

平安時代よりも豊かで平和になった現代では、極楽に憧れる人は少なくなりましたが、法然上人が開宗された浄土宗のお念仏には、今だからこそ心得なければならない教えがたくさんあります。

開宗八五〇年を迎えるにあたり、私の次の世代がお念仏を受け継いで貰えるように、心に響く布教をする所存です。

賢問子行状記 35

宝蔵寺住職　小島英裕

第二十二話「権守為家の祈願」

八十三代土御門天皇の時代、承元三年（一二〇九）四月九日に火災が起こり、誓願寺の堂宇は残らず焼けてしまいました。ところが、不思議なことに本尊阿弥陀如来は少しも傷みがありません。人々は喜び、まず仮殿を作り、しばらく本尊を仮殿に移しました。

伊勢権守為家は、長い間、貧しさゆえ全て成り行き任せの生活を送っていました。明けても暮れても貧苦を嘆き、数年の間、京都北山の鞍馬寺へ詣でて、財産や幸福を祈っていました。

ある日、為家はいつものように鞍馬寺へお参りしようと思い、誓願寺の門前を通り過ぎたところ、急な通り雨に遇い、しばらく誓願寺本堂の外陣で休むことにしました。歩き疲れたためか為家は眠ってしまいました。すると夢の中に、多聞天が現れ次のように仰いました。

「あなたは何故、遠く北山まで詣でているのか。私は鞍馬寺の多聞天である。誓願寺を守護するために、二体分身となって、いつも鞍馬寺と誓願寺にいる。今日からはこの御堂にお参りし、一心に本尊を礼拝・念仏せよ。私は念仏を称える人々から離れず、無事でいられるように日々護っている」

夢から覚め不思議だと思い、誓願寺の僧に夢のことを尋ねてみると

「こちらが多聞天さまです。昔、常慶上人が一刀三礼して彫刻したものです」

と因縁を教えてくれました。為家は、霊夢に間違いが無かったので、それからは鞍馬寺の参詣を止め、ひたすら誓願寺へ足を運びました。そして信心の功徳により、十分な財産や幸せを手に入れることが出来ました。しかし為家は、誓願寺が火災にあったことを悲嘆し、ひそかに考えていたことがありました。「私が幸福になれたのは、すべて誓願寺の本尊阿弥陀さまと多聞天さまのご利益である。報恩感謝の気持ちで、財産を再建の費用に当てよう」と大願を起こし、その旨を朝廷に申し出ました。

「そのような恩恵を受けたのであれば、真心を込めて再興するがよい」

と天皇の許しが下りたので、為家は私財を投げ打ち、土木工事を行いました。この功績により、子孫の為宗、為忠は代々誓願寺の檀家となり、家門は繁栄しました。

（つづく）

東龍寺 住職 岩瀬 賢良

インド ドタバタ 夫婦道中記 60

ラダック寺で勤行

三月十日、ゆっくり外の様子を見て戻って来ると、八時ごろに利子も起き出し、身の回りの用を済ませてから朝食を食べに外へ出かけた。ホテルのすぐ近くで、外国人が多くてもちろん日本人もいてお互いに情報交換ができるといわれる、ゴールデン・カフェという名の店を見つけ、軽く朝食をとり、再びホテルに戻った。

この日はラダック仏教寺院に行ってみようと思い、『地球の歩き方』を開き場所を確認した。前日の朝に行ったデリー城からは北西に約二キロメートルで、ニュー・デリー駅前からだと北に五キロメートルくらいの、オールド・デリー地区の北の外れに位置していて、オートリクシャーで七五ルピー（約一九〇円）だった。建物はポツリポツリとしかなく、広い道路にしては車の往来が少なく、人もあまり歩いていない所で降りた。一筋北の住宅が建ち並ぶ通りに入っていくと、他とは異なる形の建物が見え、ラダック仏教寺院だとすぐに分かった。

ラダック仏教はチベット仏教と同じ系統で、現在のインド北端の州、ジャンムー・アンド・カシュミール州の東半分ほどのラダック地方の人たちが信仰してきた仏教である。そのためこの寺院周辺には、多くのラダック人やチベット人が身を寄せて住んでいて、インド人の明るく賑やかな性格とは異なり、あたりは物静かで控え目な空気が漂っている感じがした。

門を入ると石畳が敷かれ、両側は植木と芝生がきれいに整備され、正面に本堂が建っていた。石畳の参道を進み僕たちは本堂の前まで行くと、庭の隅に寺の関係者らしき少し太めの青年がいたので、本堂に入らせてもらう様に挨拶をしたら、快く入れてもらえた。彼は日本語が上手で、何年か前に日本にいて、永平寺にも暫くいたそうだ。

僕は読経をさせてもらいたいと頼み、一人で般若心経を三巻、太鼓を叩きながら一心に読経しようと勤めたのだが、太鼓を叩くバチが、日本では見たことのない、S字に曲がった鉄製の柄で、普段は両手にバチを持つのに、一本だけなのでリズムがとりにくく、正直なところそちらの方に気を取られてしまい一心不乱の境地には到らなかった。しかし鉄筋コンクリート造りの伽藍だったので、声と太鼓がよく響きそれだけは心地よく感じた。

法具の説明を聞く　デリー ラダック寺にて

お釈迦さまのご生涯 外伝

お釈迦さまの十大弟子 26

絵・豆田織奈　文・釈尊法話会

密行第一羅睺羅尊者（その3）

羅睺羅という名前はインドの言葉で「ラーフラ」と言います。「ラーフ」とは太陽を食べてしまう悪魔でして、「ラーフラ」という名は「ラーフのような者」という意味です。釈迦族は太陽の神の末裔とされており、一族を滅ぼす者と名付けられたともいわれています。では何故、本来なら愛すべき自分の子供にそのような名をつけたのでしょうか。

仏典を紐解きますと羅睺羅尊者に関する伝承があります。耶輸陀羅妃と結婚した悉達太子ですが、物思いにふけ、生きるということに悩んでいました。仲の良い夫婦であれば、子供を望むことは不自然なことではありません。しかし、いつまでたっても耶輸陀羅妃のご懐妊はありません。それどころか、夫婦生活がうまくいっているとも思えません。周囲は二人を心配しておりました。

しかしある日突然、耶輸陀羅妃がご懐妊しました。周囲は跡取りの誕生に大変喜んだのです。周囲の喜びに対し、まったく喜ばなかったのが悉達太子でした。喜ばないどころか出家をし、城を出て行ってしまったのです。おかしいと思った浄飯王は耶輸陀羅妃を疑いました。

「もしかしたら、羅睺羅は太子の子ではないのか？」

浄飯王は羅睺羅が生まれてからの様子を思い出しました。悉達太子が喜ぶ姿もなく、羅睺羅を抱いている姿も見たことがありません。常に腫物に触るように、羅睺羅を避けています。思い出せば出すほど、疑いが深まります。

「羅睺羅は太子の子ではないかもしれない。私の孫ではないかもしれない。耶輸陀羅妃の不貞の子供ではないか？」

浄飯王は孫の出生に悩む日々となりました。

（つづく）

孫について考える浄飯王

総本山誓願寺だより

節分会

令和五年二月三日(金)

●大般若転読会

無病息災・心願成就・芸道上達等、皆さまのお願い事を仏さまに祈願致します。

●午前十時～十二時
●午後三時～四時

●日本舞踊・長唄奉納

●午後一時半～

【演目】
僧侶舞
「紅葉の連」
長唄・囃子
「勧進帳」
日本舞踊
「元禄花見踊り」

【出演】
日本舞踊・長唄桜流　桜富寿佐
桜流門弟
誓願寺僧侶

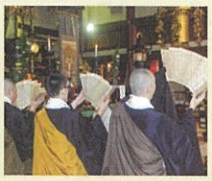
※ハンカチまき有り

●豆まき

●午後二時～

●扇塚法要

古くなった扇の供養を致します。



おもな行事予定

一月
●一日(元旦)
修正会
●十五日(日)
六阿弥陀功徳日
●二十四日(火)
法然上人追慕念仏行脚

二月
●三日(金)
節分会
●八日(水)
六阿弥陀功徳日
●十五日(水)
涅槃会

三月
●十四日(火)
善導忌
六阿弥陀功徳日
●十八日(土)～二十四日(金)
春彼岸

○各行事を予定させて頂いておりますが、世の中の状況により変更、又は中止になる場合があります。その際は、誓願寺ホームページ・SNSにて公表させて頂きます。何卒ご了承下さいますようお願い申し上げます。

SHINKYOGOHU_SEIGANJI

クイズコーナー

【問題】

5頁「インドドタバタ夫婦道中記」より、筆者の岩瀬賢良師がラダック寺で読んだお経は何でしょうか？

漢字4文字でお答えください。

○○○○

ハガキに、【答え、郵便番号、住所、氏名、電話番号、菩提寺（だんな寺）、感想】を書いてご応募ください。なお、ご提供いただいた個人情報につきましては、プレゼントの発送のみに利用いたします。今回は倉内猊下御染筆の色紙を1名さま、妙心寺さまより「醒ヶ井地蔵尊」の御朱印を5名さま、本山謹製線香を5名さまに抽選して差し上げます。ご応募お待ちしております。

【宛先】〒四四三-〇一〇五
愛知県蒲郡市西浦町北馬相十一番地
覚性院内　ちかい編集係

【締切】一月三十一日
(消印有効)

答え　○○○○
郵便番号
住所
氏名
電話番号
菩提寺（だんな寺）
感想

ちかい　第166号

発行日　令和四年十二月五日
発行所　浄土宗西山深草派
総本山誓願寺
京都市中京区新京極桜之町四五三番地
電　話（〇七五）二二一一－〇九五八
FAX（〇七五）二二一一－二〇一九
E-mail info@fukakusa.or.jp
URL　https://www.fukakusa.or.jp/

何でもお寺探偵団

妙心寺

Vol.64

今回は、京都府京都市の「髙野堂妙心寺」を訪ねました。

profile

長谷川晃雄師（髙野堂 妙心寺 第28世）42歳

京都市生まれ。龍谷大学在学中に当派の法脈相承を受ける。大学卒業後は㈱カスノモーターサイクルに就職し、オートバイの販売を担当する。その後、総本山誓願寺の書記として勤め、後に本山課長を任命され現在に至る。また、自坊妙心寺では2018年4月に住職を拝命。

探偵Y

ご住職は総本山誓願寺で本山課長としてもご活躍です。いつもニコニコと笑顔で迎えてくださいます。ご自坊は隅々まで掃き清められ、都会の中にある静寂な空間です。ご住職のお人柄が感じられるお寺でした。（探偵Y）

Q1 お寺の歴史を教えてください。

当寺に祀られている醒ヶ井地蔵尊は、壬生寺の旧本尊と同木同作であり定朝法橋持念の作です。この醒ヶ井地蔵尊は定朝死後、高野山に納められました。その後、当寺開山の蔵阿上人がこの尊像の霊夢を蒙り、知人が居る京都醒ヶ井四条へ上洛し、ここに小堂を建立し尊像を安置しました。高野の僧が建てた堂跡である故に当町は高野堂町と号しました（現・四条堀川南東）。その後、天正の頃に現在の地（中京区裏寺町）へ移転しました。この頃は真言宗のお寺でしたが、後に誓願寺の末寺となり現在に到っております。

Q2 お寺の宝物を教えてください。

本尊阿弥陀如来坐像（平安時代）、観音勢至二菩薩像（鎌倉時代）、醒ヶ井地蔵尊（平安時代）、善導大師像、圓光大師像、西山上人像、三尊来迎仏掛軸（恵心筆）等があります。特に当寺のはじまりである、醒ヶ井地蔵尊が現存していることは奇跡であります。この地蔵尊は現在も町内のお地蔵さまとして子どもたち・町内各家をお守りくださっています。

Q3 僧侶としての心がけを教えてください。

我々は限りある無常の世を生きております。この限られた時間（命）は周囲の人々を笑顔にする為に刻んでいきたいと心がけております。

また、当寺は27人の住職がその時代を懸命に生き、このお寺を守り、教えを伝えてきてくださいました。この事を常に忘れずに、私も次世代へ繋げていける様に邁進したいと思っております。

Q4 「ちかい」の読者に何か頂けますか？

普段は授与しておりませんが、今回は特別に当寺の「醒ヶ井地蔵尊」の御朱印を5名さまに授与させて頂きます。

▲「醒ヶ井地蔵尊」御朱印

▲山門

▲地蔵堂

▲醒ヶ井地蔵尊

▲本堂外観

▲本堂内観

【交通】
阪急電車「京都河原町」駅から徒歩約5分
京阪電車「祇園四条」駅から徒歩約10分

【主な行事】
春彼岸会　春分の日
秋彼岸会　秋分の日

【お問い合わせ】
髙野堂 妙心寺
〒604-8041
京都市中京区裏寺町592
TEL 075-221-1650
E-mail myoshinji28@gmail.com